令和５年度秋田県総合政策審議会
第３回 観光・交流部会
（議事要旨）

１　日時　　令和５年９月１日（金）午後３時～午後５時

２　場所　　秋田地方総合庁舎５階　502・503 会議室

３　出席者（敬称略）

【観光・交流部会委員】

丑田　俊輔・・・・・ハバタク株式会社代表取締役

齋藤　あゆみ・・・・旅のわツアー代表

佐々木　亜希子・・・能代市市民活動支援センター長（部会長代理）

吉澤　清良・・・・・立命館アジア太平洋大学サステイナビリティ観光学部教授（部会長）

【県】

観光文化スポーツ部　次長　岡部　研一

次長　川村　潤

次長　佐々木　重夫

インバウンド推進統括監　益子　和秀

関係各課長　等

４　あいさつ

●吉澤部会長あいさつ

本日は、提言書（案）の内容を議論し、完成させることが目的である。今日の議論の内容を踏まえ、最終的な修正を加えた上で、10 月に開催する第２回総合政策審議会では、私から部会としての提言を報告させていただく。

前回同様、委員の皆様からは忌憚のない御意見をいただきたい。

３　議事

（１）「新秋田元気創造プラン」戦略３の推進に係る施策の提言について

□小松観光戦略課長

（提言書（案）、他の専門部会への提案について、資料１・資料３により説明）

●吉澤部会長

提言書（案）は、五つの分野からなり、それぞれの背景と提言内容、具体的な方策という構成となっている。

提言１から順番に議論していくが、他の専門部会では、県の重点施策となっている若者や女性の県内定着・回帰、また人手不足への対応といった点も議論しているようである。

関係する部分として、提言書（案）の提言１の背景の中でも、観光業における人手不足とい

う課題が挙げられているので、まずはこの点について御意見を伺いたい。

●齋藤委員

例えば、味噌醸造元や発酵関係の事業所で働いている方の例である。この事業所で働く方は、１年か２年の短期雇用であるが、働く人にとっては修練の機会となり、企業にとっては新しい発想や新たな取組の発見につながる可能性があることから、双方にとってプラスになっているようだ。

また、観光業に従事するということは、趣味の延長線上にあるのではないか。まずは、趣味をきっかけとして来ていただき、そこから定住につながるということもあり得る。

私の場合は、地域おこし協力隊の制度を利用して起業したいと考えており、自分のやりたいこととマッチしたのが湯沢市であった。地域おこし協力隊は３年間の活動自体が目的化してしまい、定住につながりにくい傾向がある。将来やりたいことの一つの手段として制度を活用することが定住につながると思う。

●吉澤部会長

最近、大学の用務でニセコに行ってきたが、ニセコでは地域おこし協力隊の定着率が７割程度とかなり高い。要因はいろいろあると思うが、行政による定着に向けた手厚い支援があるようだ。

●佐々木委員

人手不足は観光業だけではなく、どこも大変な状況である。時給を高く設定しても応募がないところもあり、そういったところが、求人に係るアプリを使って募集したところ、応募が増えたようなので、求人や募集の間口を広げてＰＲすることが大事である。

特に、デジタルが苦手な方は、従来の募集方法を変えたがらないことも多いと思うので、サポートする必要がある。

●丑田委員

観光業に従事している人以外に、どのようにして広げていくかという視点もあり得る。例えば、シェアリングエコノミー分野においては、様々な国や地域に旅行に行った際の観光ガイドを、通常、プロが担っているが、地域の住民が臨時で観光案内に従事するような形態も増えつつある。様々なプラットフォームが出てきているので、プロ以外であっても観光業に従事できるような働き方ができるようになってきている。

また、副業についても、禁止している中小企業は多いと思うが、今の若い世代は抵抗感が少ないので、こうした余力のある方を活用することも有効である。いずれ、秋田の現状を踏まえたやり方を考えていければと思う。

●吉澤部会長

観光業の外から人を呼び込む方法はよく分かったが、やはり人が恒常的にいることは必要であるし、若者や女性が定着していくことが重要となってくる。

例えば、高校生が秋田に残り観光業に従事する、あるいは若者や女性が大学進学などで県外に出て行った後、どういう条件があれば戻って来られるか、残っていただけるかについて、考えがあれば御意見いただきたい。

●齋藤委員

ある企業では、女性の正社員を長期間募集したが集まらなかったことから、フルタイムではなく、保育園の時間帯でのパート募集をしたところ、たくさんの人が応募してきた。特に、女性は、ライフスタイルの変化に応じて希望する働き方も変わってくるので、女性の視点に立った募集方法も重要であると思う。

また、観光地においては、やはり稼げる土地かどうかという点もある。ニセコは、パウダースノーが外国人に人気があり、さらに移住者もいるので、高価格帯で稼げる地域である。こうした地域では、起業を目指す地域おこし協力隊の定着率も高いと思われる。

●佐々木委員

副業については、認めた場合のメリットなど、行政で何らかの形で発信していただきたいと思う。

●丑田委員

全国的に観光産業は人手不足であるが、一方で、大卒者が就職したいと思っている中小企業も結構あるのではないか。

「自遊人」という雑誌を発行していた会社の代表である岩佐さんは、観光産業は地域の総合力を発揮する分野であって、クリエイティブな職業であると若い人向けに話している。具体的には、地域の食をどのようにＰＲするか、地域資源をどう発掘して、ツアーに組み込むかなどをチームで話し合うなどの説明をしており、成長を実感したい若い世代にとっては魅力的な話である。

労働環境の改善を図る取組を行いながら、同時に、就職説明時には、観光産業のイメージがクリエイティブで、かつインバウンド誘客も含めて地方創生の中核であり、成長産業の一つであるようなところを若い世代にしっかり見せることが大事である。

●吉澤部会長

女性のライフスタイルの変化によって就業環境が変わることはあると思うが、一方で、観光業はフレキシブルな就業機会があるという特徴を伝えていく必要がある。

また、丑田委員から意見のあった観光産業のイメージを変えるという点についても、若い人たちに訴えていかないといけない。特に、大学生にとって宿泊業のイメージを聞くと、給与水準が低い、労働条件が不安定であるようなネガティブなイメージがあり、就職先の選択肢に入ってこないという印象である。

私も観光業はクリエイティブな職業であるとは言い続けているが、もっと若い世代に観光産業の価値というものを伝えていく必要がある。

●佐々木委員
　３（２）サステナブルツーリズムの推進とあるが、サステナブルと言っても分からない人はたくさんいると思うので、分かるような注釈などをつけていただきたい。

●吉澤部会長
　全体通して、初めて見た人でも分かるように注釈や説明が必要かと思う箇所はある。
　例えば、文化の分野で出てくる「わらび座」なども説明が必要であるので、今後、事務局と相談したい。

●丑田委員
　提言書の内容について、秋田ならではの観光のコンセプトをどこまで宣言できるか、具体化するとメッセージとして絞りすぎた感じとなってしまうし、抽象度が高いと他県でも通用するような形となる。
　例えば、（２）の冬季誘客では、秋田は日本屈指の豪雪地帯であるので、この特徴を生かしたり、玉川温泉などの湯治文化や川原毛地獄など、秋田ならではの強みをキーワードを入れると、インバウンド向けのメッセージとして分かりやすい。

●吉澤部会長
　秋田ならではなどのキーワードをよく使うが、どういう意味で使うかが重要である。少し説明を加え、分かりやすくする必要がある。
　次の提言２に入る。食品産業における新たな付加価値の創出に向けた取組の推進についてで、何か御意見があればお願いしたい。また、発酵以外のコンテンツの活用などがあればお願いしたい。

●佐々木委員
　発酵以外に無農薬・オーガニックは女性が好む分野である。

●齋藤委員
　旅行者や食品の購入者は、女性が多いと思うが、秋田のプロモーションは男性目線で力強いものが多い。女性が強い分野であるので、女性の意見を取り入れるなどの工夫があってもいい。ターゲット層に応じたプロモーションの展開に当たって、感性は大事である。

●丑田委員
　発酵に限らず「食」には魅力があり、世界中からも意中のレストランがあれば訪れる人はたくさんいると思う。そこでしか食べられないという求心力があるレストランは、海外はもちろん、地方にもあって、秋田にも年に４回は行きたいというような店があるようだ。
　共通する点はそこでしか食べられない、ローカルな地域での食材や文化、地域コミュニティとも一体となっているという魅力である。
　例えば、レストランで排出される生ゴミは、その地域の田畑で使用し、そこで採れた食材

をレストランで使うなどの循環であったり、レストランのエネルギーは、地域の里山の木材から生み出されているなど、地域のリソースをフル活用するなどのコンセプトは高く評価されている。

こういう点を評価している若い世代が美食マーケットを牽引しはじめているので、秋田でしか食べられないジビエ系の食材などの地域にある資源を活用することが大事である。

新たなチャレンジをする経営者などを支援する施策があればいいと思う。

●吉澤部会長

「食」の商品開発や販路拡大に関する様々な支援を実施しているが、他にどのような支援が考えられるか。

●丑田委員

実際にシェフや経営者にヒアリングすることもいいかと思う。

県外や海外の事例では、郊外の食材に近いところでレストランを経営することは増えていると感じているが、突然秋田に来て、知らない土地で物件を探すことはハードルが高く、コミュニティとのつながりも難しい。

そういう環境づくりの支援も有効だと思うし、同時に教育面となってしまうが、食に関するプログラムのような学習機会の提供など、中長期な視点での施策もあり得る。

●吉澤部会長

ハード整備などの現在必要な支援と、今後に向けて中長期的に行った方がいい支援とを分けて考える必要がある。

女性目線で、購買層を意識したプロモーションも必要であるし、少量多品種という視点も必要である。高品質なリンゴやさくらんぼは高価格帯であるが、購入するのは圧倒的に女性が多い。

また、「食」を多面的に考えることも必要である。食べることはもちろん、体験するなどの要素を入れつつ、観光として展開していくことが必要かと思う。

●齋藤委員

日頃考えていることの一つに、秋田の土産として何を持っていくか悩むことがある。日持ちする土産がたくさんあればいいと思う。

●吉澤部会長

土産業界はとても特殊で、土産屋自体は商品開発を行わない。基本的に卸業者が商品を持ってきて、賞味期限が切れそうになると持って帰るということで、リスクを負わない。自助努力が働きづらい環境があるので、商品を作る側が工夫しないといけない。

土産として漬物を買った際、漬物自体の量が多く、自分で消費するにしても社内に配るにしても多すぎると悩んだことがある。小分けにして販売するなど、消費者目線に合った工夫をする余地はあるので、商品開発する事業者によく知っていただくことが必要である。

次に提言３について、御意見をお願いしたい。

●佐々木委員

（２）①秋田公立美術大学との連携のところで、例えば、県出身の芸術家や他の大学など、いろいろな専門家がいるので、幅を広げるような記載がいいのではないか。

●丑田委員

提言２とも関係してくるが、県外からの旅行者はたくさんいるので、秋田市エリアの飲食店に行って秋田の食に触れる機会の提供をミルハスが担うことも考えられる。

●吉澤部会長

ミルハスは集客拠点であるので、提言（１）①の県内周遊につなげるという部分に該当するかと思う。

次に提言４について、御意見をお願いしたい。

●佐々木委員

提言４（２）スポーツを通じた地域づくりと交流人口関係人口の拡大で、「観光」「食」のワードの後に、「健康」というキーワードを記載できないか。健康寿命の延伸は県でも取り組んでおり、観光分野とは異なる分野であるが、スポーツは健康づくりにもつながってくる。

●吉澤部会長

健康は（１）多様なスポーツ活動の促進に関係する部分である。（２）は、スポーツ大会やイベント開催時の「観光」「食」などのＰＲを行う提言であるので、どのように収めるか。

健康寿命の延伸は、他の専門部会で議論されているので、この後、事務局も含め、考えさせていただきたい。

●丑田委員

（３）の部活動の地域移行について、過疎地になると、子どもも指導者も少なく、部活動自体が広域化しており、様々な大会開催時など、移動に苦労している保護者が多いと聞く。

こうした移動の負担も含め、保護者から部活動における実情を聞き取るなどにより、保護者や指導者の負担軽減につながるような方策を検討することが必要である。

●吉澤部会長

ボランティアや善意の上で成り立っている部分が多いので、実態を把握した上で、次にどうすべきか考えるということだと思う。

次に提言５について、御意見をお願いしたい。

●佐々木委員

（３）利便性の高い地域公共交通網の形成、①の情報発信についてであるが、高齢者など

のデジタルへの対応が難しい方も利用できるよう強調した記載としていただきたい。

●吉澤部会長

具体的な方策の中に、「高齢者等でも活用できる」との文言があるので、デジタルに対応できない層にも意識した記載となっていると思う。

高齢者の情報収集は、広報誌であったり、ローカルの情報系番組で行うことが多い。インターネットによる情報発信は有効であるものの、届かない層もあるということを意識しないといけない。特に高齢者は、交通弱者でもあるので配慮をお願いする。

地域公共交通について１点意見したい。交通機関の利用者は主に住民であると思うが、観光地向けの交通と分けて考える必要があると思う。バスが、観光施設も公共施設、病院にも行くなどの例はあると思うが、どの層向けのバスなのかを意識した運用をしないと、結果誰も使わないということになりかねない。

そういう意味では、男鹿の二次交通は観光に特化している特徴があり、全国的に見ても秋田県の二次交通は先進地であると思っている。

●丑田委員

ライドシェアについては、最近は国レベルでも研究が始まっているという報道があった。

規制緩和は、利害関係者が多いので、賛成・反対いろいろな意見があるので、非常にセンシティブな領域であることは理解している。

例えば、自動車が無くても歩いて楽しいウォーカブルなまちづくりを目指すとか、何らか秋田らしいビジョンがあれば、今後、民間企業等によるスタートアップや実証実験などが行われる際には、秋田が選ばれるきっかけとなるかもしれない。

このビジョンを提言書へ記載するかどうかは別として、情報発信できればと思う。

●吉澤部会長

ライドシェアについては、最近いろいろと議論されているが、一筋縄ではいかないとは思う。全体の方向性については、規制緩和の方向に向かっていくと思うが、丑田委員の意見のとおり、何か実証実験が始まる際には、事前に課題等を整理し、秋田で実施できるよう環境が整っていればいい。

●佐々木委員

秋田市とその他の地域では、事情が異なるのではないか。秋田市内以外では、自動車なしの暮らしが成り立たないと思う。地域の実情によって考えることが必要である。

●丑田委員

公共交通が充実している秋田市と五城目町の朝市のエリアにあっては、自家用車がなくても近くにスーパーもコンビニもあるし、学校も病院もある。

こうしたエリア以外の公共交通がないところでは、どこのセクターが交通を担うのか、ソリューションが変わってくる。全て一緒に考えると焦点がぼやけていしまう。

●吉澤部会長
　全体のビジョンがありつつ、秋田市とそれ以外など、地域単位で細かく課題を把握する必要があると思う。
　この他に御意見があればお願いする。

●齋藤委員
　高速道路の整備について、便利になることによって、例えば、高速の出口にあった道の駅が通過され、利用者が減るような可能性がある。ＰＲなどの情報発信については、宿泊施設に偏りがちではあるが、通過されないよう温泉地や観光地の個別のプロモーションが重要である。

●吉澤部会長
　高速交通体系が整備されると人の流れが大きく変わる事例はあるし、立ち寄ってもらう仕掛けが重要である。
　先日開催した秋田県観光振興ビジョン有識者会議では、県で想定しているターゲット層は、東京在住 60 歳代女性、仙台圏の 30 歳代女性、家族連れであるという説明があったが、こうしたターゲットの設定が必要であって、全世代・全方位的なプロモーションによる効果は難しい。齋藤委員の意見のとおり、明確なプロモーションは必要である。
　ニセコに関する情報提供であるが、ニセコの冬は有名であるが、夏場は観光客が少ないので、宿泊施設は長期休みとなる。そこで、夏場のグリーンシーズン対策として、アスレチックコースを整備している。そこに訪れている家族連れにいろいろ話を聞いたところ、札幌や函館、小樽などの観光地は大人向けであって、子どもは飽きてしまうから、ツアーの中で子ども達を遊ばせるような場所を組み込んでいるということであった。
　これで、提言１から５まで終了したが、他に御意見があればお願いしたい。

●齋藤委員
　提言１（１）の稼ぐ観光の関係に戻るが、犬などのペット連れで泊まれる施設は、県内には民宿くらいしかないという話を聞いた。都会のペット連れの方は、高所得者層が多いので、高価な宿泊施設はないということによる機会損失であると感じた。
　こうしたユーザーを取り込むことによって、稼ぐ観光、高付加価値化につながっていくと思う。

●佐々木委員
　宿泊施設の不足のほか、動物も入れる温泉があれば、県外からもたくさんの人が来る可能性はある。

●吉澤部会長
　私が知っている北海道のリゾート地でも、半信半疑でペット連れ可能な部屋を整備したと

ころ、かなりの需要があったと聞いたことがある。

●齋藤委員

スポーツの分野について、甲子園を見て思ったことは、指導者の教育方法が、野球技術はもとより、自分自身で考える力を養う、内面の指導を大事にしているいうところが印象的であった。

こうした指導者を育成していくことも大事である。

●吉澤部会長

提言書の検討は、ここまでで終了させていただく。

この後、今日の意見を踏まえて事務局の方で改めて最終案を作成することとし、委員の皆様にも再度確認していただきたいと思う。

最終的な提言書の取扱いは、部会長に一任していただきたい。

（４）その他について

特になし。

□安達観光戦略課チームリーダー

本日は長時間にわたり御意見いただき感謝申し上げる。これをもって、令和５年度第３回観光・交流部会を閉会する。